【以善会レポート】

心学の興隆目指した晨園

中山正清

はじめに

心学は「神・儒・仏の三教を融合して、その教旨を平易な言葉と通俗なたとえで説いた一種の庶民教育」（『広辞苑』第五版）で、江戸時代後期に広く普及しました。

駿河・遠江に限ってみれば、掛川がその中心といえるほど盛んでした。本稿は、掛川における心学の興隆には晨園とその息子が深く関わっていたことを示します。

掛川で心学が盛んだったことは、この地域における報徳思想の普及・定着の前提条件となったと考えられますが、心学についての研究は十分とはいえません。本稿をを契機に研究が深まることを期待します。

一、晨園から慊堂に宛てた手紙

掛川の郷土史家で西南郷村長も勤めた袴田銀蔵（一八七六～一九六七、鷹邨と号す）が昭和十七年（一九四二）に松ヶ岡山﨑家の依頼を受けて編纂した『松ヶ丘山﨑家略譜稿本』に、山﨑家四代目の晨園（一七七四～一八二九）が掛川藩校教授だった儒者松崎慊堂（一七七一～一八四四）に宛てた手紙が載っています(以下、引用文に続くカッコ内は筆者による大意)。

手紙は文政五年（一八二二）五月八日のもので、晨園が近く隠居する意向を示し、隠居後は「苟も世の微益ニも相成候事を生涯之業と致し」（少しでも世の中の役に立つことを生涯の仕事としたい）と述べています。

その上で「縦令身者何程之艱難辛苦を経、家産者何程割折候共何ヶ事業不相立候而者死而不瞑義ニ御坐候」（たとえこの身がどれほどの艱難辛苦に見舞われようと、家の財産をどれほど使おうと、この仕事を成し遂げなければ死んでも死にきれない）と、強い覚悟を示しています。

具体的には何をしたいというのでしょうか。晨園が親しんできた儒学については、「既に半百にも近き候得者、夙夜勤候而も迚茂儒業なとの出来候気遣ひ者無之」（既に五十歳近いので、朝から晩まで励んでもとても儒

学を極めることはできない）といいます。

その代りとして二つの事業を挙げています。その一つが心学の興隆です。手紙では、「先生之晰力を相願ひ加潤飾、在来之心学を沙汰いたし標出仕度」（誰もが知る慊堂の力を借りて従来の心学の欠点を除き良いところを定着させて手本となるものを作り出したい）としています。

晨園が挙げるもう一つの事業は、手に入りやすい良い国史の書籍がないので、慊堂を総裁とし一、二人の書生とともに五、六年かけて国史を編纂したいといっています。このくだりは、地方の文化人が日本の歴史についての知識を渇望している様子をうかがうことができ、非常に興味深い内容ですが、紙幅の関係から詳細をここで紹介することはできません。

また、「右二事之外尚又、先生之思召を以面白き御工夫等も御座候ハゝ御教示被下候様奉願候」（このほか慊堂先生に面白いアイデアがあれば御教示ください）とも記しています。

二、手紙の結果

晨園は手紙で知らせたとおり、翌文政六年正月に家業を長男の万右衛門（一八〇八～一八三二、幼名儀一、長じて祝蔵）に譲っています。

では、心学の興隆、国史の編纂という晨園の提案に、慊堂はどう答えたのでしょうか。慊堂の「与山崎晨園書」（『慊堂遺文』所収）は文政五年十二月に書かれたもので、晨園からの手紙に対する返事もここに記されていると考えられます。

「与山崎晨園書」では、既に文化十一年（一八一四）に掛川藩校教授を辞していた慊堂が、江戸の活動拠点として建設していた羽沢山房（現東京都渋谷区）がほぼ完成したことを「羽沢村舎既成」と知らせています。また、建設に掛かった費用と晨園からの多額の援助にも触れ、「賢者之雅貺（がきょう：おくゆかしい贈物）」などと感謝の意を表しています。

なお、晨園からの援助額について鈴木瑞枝著『松崎慊堂』（研文出版）は「与山崎晨園書」の記述から千二百十匁（約二百両）とみています。

晨園からの提案については、「想賢者遂志有日、又必践約」（晨園の志を遂げる日が来ることを思い、必ず約束は実行します）と記しています。し

かし、慊堂が心学の興隆や国史の編纂に取り組んだ様子はみられません。

晨園没後の天保五年（一八三四）になって慊堂は『縮刻開成石経』の刊行に向けた作業に取り掛かり、同十二年頃に完成させました。開成石経は唐の開成二年（八三七）に建てられた儒教の経典を刻んだ石碑で、この刊行の狙いを鈴木著『松崎慊堂』は次のように説明しています。

復古学、考証学の立ち場をとるようになった慊堂は、今まで準拠してきた宋元の経典諸本は、その頃の学者が妄りに改竄を加えたものなので信頼することが出来ないとし、そこで開成石経をその基に据え、その欠けた所は諸本を照らして補い、また文字を厳密に肯定して正しいものとし、以て後学に便あらしめようとしたのである。

晨園から多額の援助を受けた慊堂は、心学興隆や国史編纂ではなく『縮刻開成石経』の完成で晨園に報いたことになります。

三、晨園の心学理解

晨園と心学に話を戻し、慊堂への手紙で晨園は心学についてどのように書いているのか、関係個所の全文を太字で以下に示します（句読点は筆者による）。

當時世上に行れ候心学と申もの、石田勘平、豊嶋堵庵、中澤道二之輩相継、其後道二之弟子脇坂義道と申者右之説を受継世間を説廻り、其後、官命を蒙候由ニ而街道筋なと折々往来仕、先年其説を承り候事も御坐候得共、彼三輩とは遙ニ劣り候者に而、甚鄙俚なる事ニ御坐候。三輩之中道二者殊に勝れたる者之由承り候に付、其撰著なと彼是閲し候處、濂洛之奥義を能呑込候者ニ而、其上聖賢之金言要語を摘出し、種々世界の事物ニ引當比喩いたし、其上禅語なとを工みに取ませ、蠢愚の耳に入易きよふに平語に綴り至て深切成ものニ御坐候。近頃上方邊に右道二之者流なと有之、當世の風俗を考民間を喩し既に風俗を移し候事茂間々有之、僧之談義説法なとよりは遙に勝り候由兼而承り及居候ニ付、試に京浪に遊ひ右者流の尤なる者を尋暫く承り候ハゝ其説様等之始末を授り候義ハ為差事も有間敷、其上、先生之晰力を相願ひ加潤飾、在来之心学を沙汰いたし標出仕度、一ツの心掛ケニ御坐候。

若鄙懐之通成就致し候上は郷里之児女輩且者御領内之村吏なとへ丁寧喩し聞候ハゝ感発いたし、風俗淳朴に移り候者も追々可有之様致度拙之老婆深切ニ御坐候。且は、君恩之萬一茂報し候赤心ニ御坐候。

ここではまず、石田勘平（梅岩）、豊嶋（手島）堵庵、中沢道二、脇坂義道（義堂）といった主要な心学者を挙げ、中沢道二が殊に優れていると聞いてその著書を読んだといいます。そして道二は「濂洛之奥義を能呑込」（朱子学の前提となる宋学の奥義をよく理解している）と指摘し、儒教の聖人の言葉を現実世界の出来事にたとえたり、禅語を織り交ぜたりして、わかりやすく親切に記しているという感想を述べています。

晨園は心学を大衆向けにわかりやすくかみ砕いた儒学ととらえているといっていいでしょう。そこで、京・大坂で道二の流れを汲む優れた心学者を探して教えを受けるとともに、慊堂の力を借りて心学をさらに洗練して地元に普及させ、「風俗淳朴に移り候者も追々可有之様致度」（風俗が淳朴な者も追々現れるようにしたい）といっています。

四、太田資愛時代の心学

晨園が手紙で脇坂義道の講釈を聞いたといっているように、大都市や主要街道筋では心学者の講話を聞くことができました。一方、大名にも心学を修める者が増えていきました。掛川藩主太田資愛（一七三九～一八〇五）もその一人で、石川謙著『石門心学史の研究』（岩波書店）によると、資愛と世子資順は寛政元年（一七八九）から享和年間にかけて江戸で中沢道二について心学を修めたといいます。

ただ同書によると、「（資愛の手で）心学者を聘して領内に布教せしめたかどうか疑問である」とのことです。そして甲斐を中心に教化普及活動をしていた志村天目（礼助、一七四六～一八一七）が遠江国にも心学を普及させていて、掛川近辺では小松（現掛川市、旧曽我村大字平野の内）に十五人、掛川に一人の門下生がいたと記しています。

天目死後は小松の心学も振るわず、「文化期はおそらく白紙時代であつて見るべきものがなく、文政に入つて掛川を中心としてこの国（遠江）の心学が新に台頭して来た」といいます。そして、そのきっかけとなったのが、

文政九年（一八二六）に陸奥出身の菊池良貞が掛川に来て心学を唱えたことだと指摘しています。

五、掛川における心学の興隆

晨園が心学の興隆を提案した文政五年は、この「白紙時代」に当たります。晨園としては掛川の心学を再興し一層盛んにしたいという考えだったのです。

引き続き『石門心学史の研究』をみていきますと、岡田良一郎（一八三九～一九一五）の著した『池田孝路先生伝』から次の記述を引用していますので、ここで孫引きします。

于時文政九丙戌、陸奥人菊池良貞、唱二心学一至二掛川一。教レ人丁寧深切、士民争入二其門一。先生（註、池田孝路）亦質レ疑。累レ日頗受レ益。於レ是、与二戸塚勘六・山﨑万右衛門・大庭代助・村松熊平・飯田伝右衛門・高村重蔵等一、結レ社講二其学一。

掛川の町民たちは菊池良貞の講話を聞いて、心学者池田孝路（一七九五～一八七三）を中心に講舎を結成したとありますが、そのメンバーに山﨑万右衛門の名前が見えます。

また、山﨑家の墓地がある徳雲寺（掛川市西町）に「菊池良貞碑」があり、そこには良貞が掛川で講じたときの様子を「其学於徳雲寺月余遠通男女継門受教者日幾百人就中数十輩篤信之旦夕親炙翁之左右而風俗漸変」と記しています（袴田鷹邨編『掛川町内寺院仏堂金石文写明細帳』）。つまり、良貞が徳雲寺で一カ月余り講じたところ、遠方から男女が一日数百人が集まり、その中で数十人は朝から晩まで良貞の側で熱心に話を聞き、民情が変わったというのです。

この碑文からは、良貞が講じた場所は徳雲寺だったことがわかります。『池田孝路先生伝』の記述と併せ、万右衛門も「篤信」者の一人だったことがうかがわれます。

この万右衛門は、隠居した晨園の跡を継いでいた祝蔵だと考えられ、父の意向を息子が受け継いで、心学の興隆を図ったということになります。

良貞については、陸奥の人で文政十二年九月六日に常陸国信太郡の門人

のところで死去したという以外によくわかっていないようですが、池田孝路は八百屋繁蔵といい垂木村（現掛川市）出身の心学者です。孝路は、天保七年三月に掛川に心学講舎「止敬舎」、同年六月に各和に「敬譲舎」、同年七月に大池に「択仁舎」を設立しています。万右衛門らが「社を結んだ」のは止敬舎などの講舎のことでしょう。

ただし、祝蔵は天保三年（一八三二）に二十五歳の若さで死去していますから、止敬舎などの設立に関与したのは、祝蔵の弟で山崎家六代目を継いだ万右衛門（一八一一～一八六六、初め才兵衛、知盈と号す）になります。晨園は文政十二年に隠居後の志を果すことなく病死（享年五十六）しましたが、二人の息子によってその一端を実現することができたといえるでしょう。

なお、池田孝路は天保五年に掛川藩の命で領内の村々を巡講し、同十五年には止敬舎の敷地の地租と賦役を免除されるなど、藩もその活動を後援していました。

文久元年（一八六一）には、菊池良貞の碑の隣に池田孝路の碑が門人によって建てられましたが、徳雲寺に建てられたという点から、山崎家の関与が大きかったと推測していいでしょう。

佐藤四郎さん（以善会）の御教示によると、孝路の墓は掛川市亀甲の満福寺にあるとのことですから、孝路の碑が満福寺でなく徳雲寺にあるということは、徳雲寺が心学を学ぶ人たちにとっては記念すべき場所と意識されていたと考えられます。

池田孝路碑建立より前の弘化二年（一八四五）には、山崎庄兵衛（山田側に分家した晨園の四男才右衛門のことか？）が山田側（掛川市南西郷）に江戸から心学者中村徳水を招き、亡き晨園の妻世為（せい）、分家の山崎源助らが集まって講話を聞いています（及川大渓「中村徳水の駿遠地方に於ける心学教化」：『地方史静岡』第三号）。

寛政期から明治初年までに設立された心学講舎は全国に約百七十舎ありましたが、駿河・遠江では合わせて四舎だけです。そのうち掛川城下とその周辺だけで前述の三舎があったということは、掛川周辺で心学がいかに盛んだったかがわかります。

晨園は慊堂への手紙に「郷里之児女輩且者御領地内之村吏なとへ丁寧喩し聞候ハゝ感発いたし、風俗淳朴に移り候者も追々可有之様致度」（郷里の子供や女子、さらには掛川藩領の村役人らに丁寧に諭し聞かせ、それに感化されて淳朴な生活をする者がしだいに現れてくるようにしたい）と書いていますが、ほぼ実現していたといっていいでしょう。

ただ、山﨑家の心学に関わる活動は、現在のところ、前記の事柄ぐらいしか見出せていません。これ以外にも山﨑家の人たちが止敬舎で講話を聞いたりその活動に財政的な援助をしたことはあったでしょうが、しだいに熱意が薄れていったように感じられます。

六、報徳普及の前提となった心学

掛川に大日本報徳社があり、報徳運動の一大拠点であることはよく知られています。では、なぜ掛川が報徳運動の中心となったのでしょうか。岡田佐平治・良一郎父子らの活躍があったのはもちろんですが、その前提として掛川で心学が盛んだったことが考えられます。

『石門心学史の研究』は、「（心学は）堵庵以来段々に唯心論的傾向が濃厚になつて末流屢々抽象的な観念論に陥る情勢を示した。然るに、時勢は逆に、対外関係の結果からも士庶経済の逼迫の結果からも、益々経済更正の必要を痛感せしめずには措かなかった」と、天保から幕末にかけての心学と世情について記しています。

その上で、報徳などの思想が「経済更正の方途を指示する教義と建前を堅持した」と指摘し、心学によって領民生活の改善向上を図っていた下館、烏山、谷田部など北関東の諸藩が「天保年間に袂を連ねて報徳教の陣営に飛び込んでしまつた」ことを紹介しています。

現在の御殿場市の豪農で心学普及に尽力した後に二宮尊徳の指導を受けて報徳思想を受容した小林平兵衛（一七七九～一八四九）についての研究もあります（仁木良和「報徳思想の受容について」：『立教経済学研究』四十七巻二号）。

心学から報徳に移ったのは、掛川でも同様でした。つまり、「倹約・正直等の徳目を重視」（『角川新版日本史辞典』「心学」項）して、それをわかり

やすく説くだけの心学から、生活の改善や生産の向上策を具体的に示す報徳思想が主流となったのです。しかし、神儒仏の教えを基本とする庶民道徳の思想、結社を作り講話を聞かせるという教化方法などは心学と報徳に共通するものであり、心学が掛川における報徳思想の普及の前提になったことは間違いないでしょう。

（了）